仮面ライダー龍騎　Middle schoolウォーズ

海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー龍騎　Ｍｉｄｄｌｅ　ｓｃｈｏｏｌウォーズ

【Ｎコード】
Ｎ８８５０Ｊ

【作者名】
海

【あらすじ】
西暦２０ＸＸ年。日本では、全国から一つの中学校を選び出し、さらにそのなかから３年生の数十人を選ぶ。そしてその全員を無人島に連れて行き、そこで最後の一人になるまで戦わせるという、地獄のプログラムが年に一度実行されていた。
中学３年生の「上井　憲司」は、運悪くその地獄のプログラムに参加させられた。憲司は、生徒＝「仮面ライダー」同士の戦いを終わらせることを誓う。
だがそんな矢先、ナイトに変身する親友「坂下　太郎」は、憲司に

協力するどころか、「憲司を潰す」と言い放ち挑みかかってきた。
そして次々と目の前に新たなライダー達が現れるが、彼らも他のライダーを敵視し、攻撃する者ばかりだった。
そして、ライダー達のバトルロイヤルにまきこまれながら、憲司はこの地獄の真相に近づく・・・。

序章・始まり（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

序章・始まり

始まりは、突然だった・・・。

田舎道を、バスが走っている。

車内では、修学旅行ではしゃぐ中学生でいっぱいだ。
それを注意する先生も、それはそれでうるさい。
一番の被害者は、バスの運転手さんだろう。

バスではしゃぐ中学生の一人、「上井（うえい）　憲司（けんじ）」は修学旅行を前々から楽しみにしていた。
隣の席に座る友人の「藤山（ふじやま）　浩二（こうじ）」と話し込んでいる。
彼らの後方の席で、担任や友人と話しているのが、「坂下（さかした）　太郎（たろう）」だ。
憲司とは、小学生の頃からの親友だが、最近は遊ぶ機会もめっきり減った。

そんな彼らの乗るバスの車内は、一秒経つごとにうるさくなる。

すると突然、バスが道の真中で停車した。
もちろん、車内は静まり、生徒達がざわめきだす。
しかし、担任の教師やバスの運転手は、憂鬱そうな表情で、下を向いている。

生徒達がますますざわめいた、その時、車内に手榴弾のような物が投げ込まれた。
それが破裂すると共に、中から煙が噴出された。

煙が車内に充満し、生徒達は皆、眠りにおちた・・・。

序章・始まり（後書き）

キャラクタープロフィール？
上井（うえい）　憲司（けんじ）
１５歳。２０ＸＸ年度の高代中学校３年３組。
性格は明るく、しかし落ち込むときはすごく落ち込む。
怒ると手がつけられない一面も。

第一章・新たなる運命（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第一章・新たなる運命

憲司が目を覚ますと、そこは大きな体育館のようなところだった。
あたりを見回すと、浩二や太郎を含めた数十人が倒れていた。
その周りを、銃器を所持した自衛隊が囲んでいる。

すると、眠っていた浩二らが目を覚まし、起き上がりだした。

全員が目を覚ました頃、アナウンスが聞こえてきた。

―皆、目が覚めたようだね―

スピーカーから聞こえる男の声に、自衛隊の隊員を含めた全員が反応した。

―突然だが君達は・・・、『プログラム』の参加者に選ばれたのだ！―

憲司らは一瞬硬直した。

―『プログラム』は知っているだろう―

もちろんみんな知っていた。

『プログラム』とは、政府が年に一度実施している政策で、通称「地獄のプログラム」。
日本国内から公立の中学校を一つ選び出す。さらにその中学校の３年生から数十人を選ぶ。そして選ばれた生徒を無人島に連れていき、最後の一人になるまで戦わせるというものである。

ルールは単純明快で、最後に生き残った者だけが島を生きて出られる。相手を殺すためなら、どんなことをしてもいい。しかし、無人島から逃げようとしたら、すぐに腕輪が爆発し、殺される。プログラム終了は、開始時刻からちょうど1ヶ月後。その時点で生存者が二人以上いたら、全員の腕輪が爆発し、生き残りなしとなる。

その『プログラム』の参加者に、憲司たちは選ばれたのだ。

泣き喚く者、黙りこくる者、考え込む者、参加者達の様々な反応を全て無視し、アナウンスは続いた。

―私は政府の者だ。今から君達全員にナップサックを渡す。それについて私が説明するので、しっかり　聞くように―

憲司が渡されたナップサックの中を覗くと、そこには八つの物が入っていた。

まず「一ヶ月分の食料」に「一か月分の水」、さらに「コンパス」、「島の地図」、「キャンピングナイフ」に「ペンライト」、そして「ロープ」と「タオル」、最後に「寝袋」に「救急セット」だ。

―それは『プログラム』の重要アイテム第二位だ。所持することは強制ではないが、ないと困るものばかりだ―

すると突然、参加者の一人が叫んだ。

「あっ！これは！」

―そうそう、君達が眠っている間に、「腕輪」をはめさせてもらった！―

よくみると、参加者全員の右腕に、無人島から逃げ出そうとした参

加者の始末と、政府の者に参加者全員の居場所を知らせるという、二つの役目を負ったＧＰＳ機能つきの「腕輪」がはめられていた。

―そして、次が『プログラム』の最重要アイテムだ―

参加者全員に渡されたのは、長方形で中にカードが入っている、一見なんの変哲もないカードケースだった。

参加者達も、これのどこが最重要アイテムなのかと、首をかしげている。

―それは「カードデッキ」だ。それを使って諸君には、「仮面ライダー」になってもらう！―

「仮面ライダー」という、聞き覚えのないフレーズに、参加者達は、ますます困惑した。

―仮面ライダーとは、鏡の中の世界「ミラーワールド」に出入りできる者のことだ。知っているとおもうが、この『プログラム』参加者は、他の参加者を殺すためなら、どんなことでもしていい。だが、仮面ライダーの力を使わず、人を殺してはいけない！これは原則だ！破れば腕輪が即爆発する！！―

それを聞いて、数人の参加者が腕輪をはずそうとしたが、中々外れない。

―その腕輪は頑丈でね、我々が所有する装置からでる電波をキャッチしないと、外れないんだ。それから、あまりいじると爆発するぞ！―

それを聞き、参加者全員が腕輪を体から遠ざけた。

―では君達、そろそろ『プログラム』開始の時間だ！健闘を祈る！！―

抱えきれない不安を抱え込み、憲司は拳を強く握った・・・。

第一章・新たなる運命（後書き）

キャラクタープロフィール？

藤山（ふじやま）　浩二（こうじ）

１５歳。２０ＸＸ年度の高代中学校３年３組。

おっとりしていて、争いを好まない性格。

実は、冷静に状況を見極めることに長けており、『プログラム』参加中は、憲司のよき相談相手。

第二章・襲い掛かる親友！？（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第二章・襲い掛かる親友！？

憲司が目を覚ました場所は、『プログラム』の舞台である無人島の中心にある、「本部」と呼ばれる建物だったようだ。
その体育館のような内部とは裏腹に、外見は真っ白で、何者も寄せ付けない威圧感を放っていた。
さらに、周りを高い壁に囲まれ、『プログラム』開始後は自衛隊の先鋭部隊に守られる。
『プログラム』開始以降、本部に近づいた参加者は、彼らの重火器の餌食となる。

憲司は島の深い森の中にいる。
『プログラム』開始の鐘が鳴り響いてから数時間が経っただろうか、あたりがだんだん暗くなってきた。日没が近づいているのだ。
憲司は大きな木を見つけ、その根元に腰掛けた。
ナップサックから水を取り出し、口に含もうとした、その時、背後で誰かが自分の名を呼んだ。

「えっ？」
憲司が振り向くと、そこには傷を負った浩二が倒れていた。
「お、おい！浩二！！」
憲司は浩二に駆け寄ると、自分のナップサックから救急セットを取り出した。

浩二が目を覚ますと、そこには懐中電灯の光が輝いていた。
視線を右にうつすと、憲司が缶詰を食べていた。
「お？気づいたか、浩二！」
憲司は笑顔で言った。
「あ・・、うん」

「そうか。・・あ！これ食べる？」
そういうと、憲司は浩二のナップサックから缶詰を取り出した。
「いや、今は・・いい・・」
「そう・・」
浩二の元気のない返事に、憲司は少し残念そうに言った。
「ああ！それよりどうしたんだ、その怪我！？」
憲司の質問に浩二は顔を曇らせた。
「それは・・・」
「ん？」
「実はね・・・」

物語は、一時間半前にさかのぼる。
浩二は森の中を歩いていた。
しばらくすると、小さな廃屋にたどり着いた。
中に入ると、大きな鏡が目に入った。
奥に進もうとしたが、何かの気配を感じ、振り向いた。
すると、先ほどの鏡の中に、仮面ライダーが立っていた。
浩二は即座に変身し、ミラーワールドに飛び込んだ・・。

「ほお、で、健闘するも敗れ去った・・・ってわけか」
物語は、憲司が浩二のやられっぷりをバカにしている現在に戻る。
「だって、相手が強かったから・・。カードデッキも壊れちゃったし・・・」
「え？そんな強敵相手で、なんで死ななかったんだ？カードデッキが壊れたらモンスターに・・」

ミラーワールドには、「ミラーモンスター」と呼ばれる怪物が生息している。
そして、仮面ライダーは皆、ミラーモンスターと「契約」しているのだ。

「契約」とは、ライダーはモンスターに「食料」を提供する、そのかわりモンスターはライダーに力をかす、というものである。
モンスターの食料とは、他のモンスターが死亡時に発生するエネルギー体であり、それを与えないと、「契約違反」となり、契約していたライダー自身が襲われる。
そうならないためには、他のライダーを倒し、その契約モンスターを倒すか、ライダー撃破の褒美として与えられる野生モンスターを倒すしかない。
そして、カードデッキを失ったり、モンスターとの契約の証である「契約カード」を失った場合も、「契約違反」となるのだ。
さらに、ミラーワールドにいるときにカードデッキが破壊された場合、変身解除され現実世界に戻れなくなる。
そして、ミラーワールドに生身の人間は長時間存在することが出来ないため、一定時間を過ぎると粒子化して消えてしまうのだ。

「いや、契約モンスターは相手のライダーにやられちゃったし、カードデッキはミラーワールドから脱出した後、壊れたし・・・」
「おお、そうか！運がいいよな～、お前は！」
憲司は一安心したようで、うれしそうに言った。
「ふぁ～あぁ、安心したら、眠たくなってきた・・。じゃ、おやすみ～」
寝る準備を始めた憲司に、浩二が言った。
「ねえ、僕もこれから、憲司と一緒にいってもいいかな？」
憲司はため息をつきながら浩二のほうを向いた。
「当然でしょ！お前これから生き残れんの？一人で！」
憲司の問いに、浩二は涙ぐみながら答えた。
「う、うん、ムリだね、僕じゃ」
「そうでしょ？じゃっ、おやすみ」
憲司は軽く微笑むと、懐中電灯を消した。

次の日、憲司たちは早朝から歩き出した。
一定の場所にとどまると、他の参加者(ライダー)から狙われ放題だ。

しばらく歩くと、少し拓けた場所にでた。
「うん、ここで一休みするか！」
憲司の提案に、浩二は意外な返事を返した。
「太郎・・！」

浩二の視線の先には、坂下　太郎が立っていた。
「おお、太郎！」
憲司は小学生の頃からの親友に、笑顔で話し掛けた。
しかし、太郎はカードデッキを木にくくりつけられた鏡に向けた。

すると、鏡の中から「Ｖバックル」と呼ばれるベルトが現れ、太郎の腰に巻きついた。
「変身！！」
太郎はそう叫ぶと、拳を握った右腕を曲げながら、左に向けて振りかぶった。
そして、左手に持っていたカードデッキを、Ｖバックルにセットすると、瞬く間に太郎は「仮面ライダーナイト」に変身した。

「えっ？」
戸惑う憲司に太郎は言った。
「戦え、上井！」
普段、憲司を名前で呼ぶ太郎だが、今は苗字で呼び、口調も激しい。
太郎(ナイト)は浩二と憲司を交互に見た後、ミラーワールドに飛び込んだ・・・。

第二章・襲い掛かる親友！？（後書き）

キャラクターファイル？

坂下（さかした）　太郎（たろう）

１４歳。今年度の高代中学校３年５組。

わがままな性格だが、友達想いでもあり、憎めない性格。

憲司や浩二とは親友だが、生き残るため、彼らにも冷徹に振舞う。

第三章・戦いの傷跡（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第三章・戦いの傷跡

親友に戦いを挑まれた憲司は、戸惑いながらも、カードデッキを取り出した。

太郎の動きを真似ると、Ｖバックルが憲司の腰に巻きついた。
「よし・・」
憲司は息を吸い込むと、右手を左斜め上に伸ばし、叫んだ。
「変身！」
すると、憲司の姿は「仮面ライダー龍騎」へと変わった。

一瞬、浩二のほうを振り返り、龍騎（けんじ）は、ミラーワールドへと飛び込んだ。

鏡に飛び込んだ龍騎は、周囲を鏡に囲まれた不思議な空間にたどり着いた。
あたりを見回すと、スクーターのような乗り物が目にはいった。
龍騎はそれに乗り込み、文字通り「鏡の中」のような空間を、走り出した。

しばらくすると、元の森に戻ってきた。
しかし、そこに浩二はおらず、よく見ると、どこか景色が違う。
左右が反転しているのだ。
龍騎は、ここが「ミラーワールド」なのだと気づいた。

すると突然、背後からナイトの声が聞こえた。
「さあ、始めるぞ」
龍騎が振り向くと、ナイトが自身のカードデッキから、アドベントカードを取り出すところだった。

ナイトは取り出したカードを自身の召喚機「翼召剣(よくしょうけん)ダークバイザー」に装填した。
「ソードベント」
感情のこもっていない男性の声が、ダークバイザーから発せられる。
すると、ナイトの手元に、ナイトの契約モンスターの尾を模した槍、「ウィングランサー」が装備された。
驚く親友に、ナイトは無言で攻撃を仕掛けた。
「グッ！」
ナイトの攻撃が直撃した龍騎は、反動で後ろに吹っ飛ぶ。

「くっそ～！」
龍騎は、自身のカードデッキからアドベントカードを引き抜くと、ナイトの見よう見真似で、左腕に装備された「龍召機甲(りゅうしょうきこう)ドラグバイザー」に装填(ベントイン)した。
「ソードベント」
ナイトの時と、同様の音声が発せられ、龍騎の元に「ドラグセイバー」が現れた。

「うぉ～！！」
ドラグセイバーを振り回しながら飛び掛る龍騎を、ナイトはさらりと避け、さらに背後から攻撃した。
「くっ・・」
戦いになれていない龍騎は、早くもギブアップ寸前だ。

「そろそろ止めだな・・・」
そう言いながら、ナイトはカードをベントインした。
「ファイナルベント」

音声が発せられると共に、ナイトは必殺技の体勢にはいる。

しかし、そこでナイトは、自分の腕が粒子化しだしていることに気づいた。

「ちっ！時間切れか・・・」

仮面ライダーのミラーワールドでの活動時間は、九分五十五秒が限度なのだ。

「命拾いしたな！」

それだけ言い残すと、ナイトは姿を消した。

龍騎はボロボロの体で立ち上がり、現実世界へと戻った・・・。

第三章・戦いの傷跡（後書き）

仮面ライダーファイル？
仮面ライダー龍騎
上井憲司が変身する仮面ライダー。基本カラーは赤。
ファイナルベントの技は、ドラグレッダーと共に空中に舞い上がり、ドラグレッダーのエネルギーを受けながら敵に蹴りを決める「ドラゴンライダーキック」。

第四章・一つの決意（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第四章・一つの決意

ミラーワールドから脱出し、浩二の元へ帰ってきた憲司。
その体は傷つき、顔は苦痛にゆがむ。

「憲司！！」
浩二は憲司に走り寄る。

「なあ、浩二・・・」
憲司が口を開く。
「俺、戦って感じたのは『痛い』ってことだったんだ・・」
「そりゃそうだよ！大丈夫！？」
「ああ、そう簡単に死なないよ・・。それより・・・」
憲司は少し黙り込み、話を続ける。
「俺、思ったんだよ・・・、『戦いを止めたい』って・・。俺、思ったんだよ、こんなの間違ってるって・・・！」
浩二は不安そうな顔で言う。
「で、でも、そんなことできるのかな・・？」
「わからない・・・。でも・・俺は止めたい！」
うっすらと笑いを浮かべ、憲司は続ける。
「俺はこれから、人を守るために戦うから！そのためだけに変身するから！！」

浩二は憲司の顔をしばらく見つめていたが、笑顔で口を開いた。
「できるんじゃない、憲司なら！僕も、君に賭けてみるよ！」

「そうか、ありがとう・・・・」
憲司はそう言うと、気を失った。

ここは、憲司達がいるところから、かなり離れた場所。
「まずは、そうだな・・、上井とかどうだ？楽勝って感じだろ！」
『プログラム』参加者であろう少年が喋っている。
「ああ・・、そうだね」
もう一人の少年が答える。
「じゃ、最初のターゲットは上井憲司ってことで！」
「う、うん・・・」

ここは、憲司達参加者のいる、無人島の最南端。
「お前は！」
太郎は自分と同じ参加者の「松山（まつやま）　聡（さとし）」に言った。
「やあ、太郎！」
聡は明るい口調で喋った。
「お前も・・・、俺と戦いに来たのか！」
「なら・・」といいながら、太郎はカードデッキを取り出す。
「いや！俺はお前と戦いにきたわけじゃ、無いんだよ！」
聡の意外なセリフに、太郎は戸惑う。
「どういうことだ！何が言いたい！！」
声を荒げる太郎に、聡はニコニコしながら聞く。
「この『プログラム』をぶち壊す！・・・興味は、無い？」
太郎は、驚きを隠せないでいた・・・。

第四章・一つの決意（後書き）

仮面ライダーファイル？
仮面ライダーナイト
坂下太郎が変身する仮面ライダー。基本カラーは青。
ファイナルベントは、ウィングランサーを芯にマントをドリル状に変形させて突撃する「飛翔斬（ひしょうざん）」。

ｄａｉｎａさん、感想ありがとうございます！
また、暇な時にでも見にきてください。

第五章・戦いの始まり

『プログラム』が始まって、３回目の夜明けがやってきた。
憲司はその頃、島の最東端の崖の上に立っていた。
潮風が頬をかすめる。
（俺は・・・、戦いを止めたい！まずは・・、太郎を説得することからだな・・・）
「憲司～！」
戦いを止める方法を考えていた憲司に、浩二が声をかけた。
「おお、朝飯できたか！今行く～」
憲司は数メートル離れた浩二のところに、走っていった。
その様子を、少し離れた草むらから、覗く者達がいる。
憲司達をターゲットに選んだ二人組みだ。
「奇襲でいくか？」
一人が言う。
「そんな・・・。あ！でも、生き残るためだもんな・・」
「そういうこと！」
憲司は食パンを食べている。
「ん～、やっぱジャムがないとダメなんだよな～、俺は！」
「まあ、まあ、贅沢言うもんじゃ・・・」
憲司の文句に答えようとした浩二だったが、その言葉はいきなり詰

まる。

「ん？どしたの、浩二？」

憲司は軽いノリで言う。

「あ、あれ・・！」

浩二の視線の先には鏡があり、その中には仮面ライダーが二人たたずんでいた。

憲司は無言でカードデッキを取り出すと、鏡に向けた。

「変身！」

憲司は龍騎となり、ミラーワールドに飛び込んだ。

ミラーワールドについた龍騎を待ち受けていたのは、「仮面ライダーベルデ」と「仮面ライダーガイ」だった。

「おい！俺はお前らと戦う気は無い！それを・・、言いに来ただけだ！」

憲司の言い分に、ガイは動揺したが、ベルデは無反応だった。

「どうした？何とか言えよ！」

「ああ、悪いな。あまりにバカらしくてな、つい・・」

ベルデのセリフに龍騎は声を荒げる。

「と、とにかく！俺はお前らとは戦わないぞ！いいな！」

「いいぜ。ま、俺は戦うけどな！！」

そういうと、ベルデはアドベントカードを、自身の左太股に装着されている召喚機「バイオバイザー」にベントインした。

「クリアーベント」
その音声と共に、ベルデの体はたちまち透明になった。
「あ？どこ行った？えっ？」
龍騎は動揺を隠せない。
「ここだ！」
透明なベルデに背後から蹴られ、龍騎は数メートル吹っ飛んだ。
「いって～」
龍騎は背中をおさえ、倒れこんでいる。
「さあ、お次はこれだ」
「ホールドベント」
ヨーヨー形の武器、「バイオワインダー」がベルデに手元に現れる。
「タァ！ヤァ！」
ベルデの執拗な攻撃に、龍騎は翻弄される。
「ん～、もうちっと手ごたえがあると思ったのに・・。まあ、いいや」
ベルデは、カードデッキから自身の切り札であろう、アドベントカードを取り出しながら呟いた。
と、そのとき、ベルデやガイの背後で音声が聞こえた。
「ファイナルベント」
「なっ？」
ベルデはそう言いながら、振り返る。

契約モンスターの「エビルダイバー」の背に乗り、「仮面ライダーライア」がベルデに突っ込んだ。

爆発が起こり、ベルデとガイは吹っ飛んだ。

「くっ、覚えてろ！」

そう言い残すと、ベルデはガイを連れて逃げていった。

「あ、あんたは？」

龍騎の問いに、ライアは答えることなく、去っていった・・・。

第五章・戦いの始まり（後書き）

その他の情報？
高代中学校（たかだいちゅうがっこう）
首都圏に存在する、公立の中学校。
男女共学で、３年生は５クラスまである。

第八章・館での遭遇（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第八章・館での遭遇

憲司と浩二は朝食を食べている。

傷だらけの体で、憲司は言う。

「俺さ・・、どんだけ怪我したら気がすむんだろ？」

浩二がニヤッとしながら言う。

「まあ、『プログラム』始まってから、全戦全敗だしね・・」

「いやっ、それでいいんだよ！俺は戦いを止めるために戦ってるんだから！！」

憲司が必死に訂正する。

憲司達が楽しそうに話してる頃、島の北西にある廃墟となった館の地下室で、二人の参加者が話していた。

「他(てき)の参加者はこの館を知らないようだね」

背の低いほうが言う。

「ああ・・・、まあ、好都合だな・・・・」

もう一人が低い声で言う。

「浩二～！早く！」

憲司が島の東側の浜を、北に向かって歩きながら言った。

「待って、もう、もう、疲れたよ！」

憲司を、息を切らしながら追う浩二が答えた。

「後ちょっとなのに・・。ま、しょうがないか・・」

そう呟くと、憲司は浩二のほうに走っていった。

翌朝、憲司らは島の北西にある「あの」館にやってきていた。

「なに？ここ」
浩二が館の大きさに驚きながら、聞いた。
「ふふふ、すごいだろ！プログラムが始まってから、お前に会うまでに見かけてたんだよ！」

「へ～・・・」
そういいながら、浩二は館の扉に手をかけた。
すると、突然二人組みの参加者が現れた。
昨日、館の地下室で話していた二人だ。

「山内！・・それと・・・、近藤か」
憲司が二人を指差し言った。

「おいおい藤山！他人（ひと）の家に不法侵入する気か！？」
背の低いほう、憲司に近藤と呼ばれたほうが言う。

「お前んちじゃないだろ！だいたい、なんの用だ！？」
憲司の攻撃的な口調とは対照的に、挑発的に近藤は言う。
「ははっ、決まってんだろ～？た・た・か・い、だよ！」

「そういうことかよ・・」
憲司はカードデッキを取り出す。

「それでいいんだよ」
そういいながら、近藤もカードデッキを取り出すが、憲司はすぐにカードデッキをしまった。

「どういうことだよ！？戦えよ！」
「やだね・・。俺は戦いを止めるんだ」
声を荒げた近藤に、憲司は静かに答える。
「は？戦いを止める～？勝手に言ってろ！」
そういうと、近藤はカードデッキを館の窓に向け、叫んだ。
「変身！」
すると、近藤の姿は「仮面ライダーシザース」に変わった。
「かかって来い！」
そう言うと、シザースはミラーワールドに飛び込んだ。
「お前は・・、戦わないのか？」
憲司の問いに、山内は表情一つ変えずに答えた。
「お前は・・、俺と戦う資格があるのか？」
「生意気な・・。見とけ！」
そう言い残すと、憲司は龍騎に変身し、シザースを追った・・・。

第八章・館での遭遇（後書き）

キャラクターファイル？
近藤（こんどう）　裕也（ゆうや）
１４歳。今年度の高代中学校３年１組。
調子のいい性格で、自分にとって都合がいいと思った相手には、すぐに取り入る。
そのため、憲司や浩二には嫌われている。

仮面ライダーファイル？
仮面ライダーシザース
近藤裕也が変身する仮面ライダー。基本カラーはメタリックオレンジ。
ファイナルベントの技は、ボルキャンサーが両腕でシザースをジャンプさせ、空中前転しながら体当たりする「シザースアタック」。

第九章・勝ち目なし！？（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第九章・勝ち目なし！？

龍騎はシザースと向かい合っている。

「さあ、かかってこいよ！」

シザースは龍騎を指差し、挑発する。

「ああ、わかってるよ」

龍騎はカードをベントインしながら言った。

「ソードベント」

音声と共に、龍騎のもとにドラグセイバーが現れた。

龍騎はそれを右手に持ち、シザースのほうに走っていった。

「ふん、まあまあかな？」

そういうと、シザースもカードをベントインした。

「ストライクベント」

音声と共にシザースピンチと呼ばれる鋏状の武器が現れた。

それを装備したシザースに龍騎が襲い掛かる。

「どりゃー！」

龍騎の攻撃を防ぎ、シザースはすかさず反撃に出る。

「ハア！タア！ヤァ！」

シザースの躊躇無い攻撃に、戦うことに迷いを感じている龍騎は、どんどん追い込まれる。

「く、くそ！俺だって・・」

龍騎がそこまで言ったところで、シザースが渾身の一撃を決める。

「うぁ〜！」
龍騎は大きく吹き飛び、積んであった木材に突っ込む。
木材の山は崩れ、龍騎を下敷きにする。

「へへ、もう終わりか？」
シザースは止めを刺すため、カードデッキに手を伸ばす。

そのとき、木材の残骸から音声がした。
「ストライクベント」

「ん！」

シザースがそれに気づいた瞬間、木材は吹き飛び、下からドラグクローを装備した龍騎が現れた。
「はぁぁ・・」
龍騎はドラグクローを装備した右腕を後ろにさげ、一気に前に突き出した。
「ダァー！！」

ドラグクローから放たれた火炎は、シザースを襲い、爆発を起こした。

龍騎は突き出した右腕をさげると、ため息をついて後ろを、現実世界への出口のほうをむいた。
そして、油断しきって歩き出す。

しかし、爆発の黒煙が晴れると、そこにはシェルディフェンスと呼ばれる盾を構えたシザースがいた。
彼は龍騎の隙だらけの背中を見つめ、カードをベントインした。

「アドベント」
龍騎が、現実世界へ通じる窓の前まで来たとき、突然シザースの契約モンスター「ボルキャンサー」が現れ、龍騎に襲い掛かった。
「うわぁ～！」
龍騎はまたしても吹き飛ぶ。
そのころ現実世界では、浩二と山内が話していた。
「奴は近藤には勝てない。戦いを止めるなどと言っている奴に、近藤は倒せない・・・」
山内の言葉に、浩二はこう返す。
「そりゃ倒せないでしょ、倒す気ないんだから」
「ふっ、確かにそうだな・・」
山内は薄っすらと笑みを浮かべ、続ける。
「だが・・・、ライダー同士の戦いで、相手を倒さないということは、自らの死を意味する・・・」
「そうかな？憲司なら大丈夫な、気もするんだけどな～」
憲司は涼しげにそう言うと、今度は山内に疑問を問い掛ける。
「ところで、なんでカードデッキを所持してない僕を攻撃しないの？」
「お前は・・、俺に殺される資格があるのか？」
浩二はニヤッとすると、答えた。
「あれ～？似たようなセリフ、前にも聞いたな～」

シザースが歩いている。
彼の前には龍騎が倒れている。
「死んだか？」
シザースの問いに、龍騎は反応しない。
「まあ、念のためやっとくか！」
そういうと、シザースはカードデッキからカードを取り出した・・・
。

第九章・勝ち目なし！？（後書き）

キャラクターファイル？

山内（やまうち）　闘樹（とうき）

１４歳。今年度の高代中学校３年１組。

非常に暴力的な性格で、学校でもたびたび事件を起こす問題児。

近藤が自分に取り入ろうとしているのは知っているが、それを利用して彼を手下としている。

第十章・役者はそろった！（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十章・役者はそろった！

シザースは、「ファイナルベント」のカードを持っている。
「さあ、死んでもらおっか」
そう言うと、シザースはカードをベントインしようとした。

しかし、そのとき、龍騎が立ち上がり、シザースを殴り飛ばした。
「油断しすぎだぜ、お前」
龍騎は、地面におちていたドラグセイバーを拾い上げながら言った。

「ふん・・、おもしろい！」
シザースはシザースピンチを腕に装備すると、龍騎に襲い掛かった。

現実世界では、浩二が山内に嫌味をいっていた。

「あれ？君の相棒、ちっとピンチじゃない？僕が助けに行こうか？」

「いや・・、奴がその程度の人間なら、滅べばいい・・・」
山内が静かに言った。

「あのさ、さっきから、その喋り方が気になるんだけど。中二ですか、君は？」

浩二の問いに、山内は笑みをうかべて答える。
「・・・喋り方などなんでもいい。それより・・、客が来たようだ・・」

「え？」

浩二が振り返ると、そこには太郎と聡がいた。
「お、太郎にさとっちじゃん」
浩二が笑顔で手を振る。
ニコニコしながら手を振り返す聡と、顔をしかめてミラーワールドを覗く太郎は、対照的だ。
「憲司・・。」
そういうと、太郎は窓にかけていき、カードデッキを取り出した。
「変身！」
ナイトとなった太郎は、ミラーワールドに向かった。
「あ～あ、戦っちゃだめだよ・・。・・・、しょうがない！俺もいくか」
聡もカードデッキを取り出すと、それを窓に向けた。
「変身！」
聡がそう叫ぶと、彼の姿は仮面ライダーライアへと変わった。
「さあ、いくか！」
そう呟くと、ライアはナイトを追った。
「どうする？お前もいくか？」
浩二の質問に、山内は静かに答える。
「・・・、これでやっと・・、俺の戦う価値がでたかな？」
そして、笑みを浮かべ、続ける。
「役者は・・、そろった！」
山内はミラーワールドを見つめながら、紫のカードデッキを取り出した・・・。

第十章・役者はそろった！（後書き）

キャラクターファイル？

松山（まつやま）　聡（さとし）

１５歳。今年度の高代中学校３年５組。

人当たりのいい性格で、学校でも人気者の部類に入る少年。

実は太郎とは、中学校での三年間、ずっと同じクラス。

仮面ライダーファイル？

仮面ライダーライア

松山聡が変身する仮面ライダー。基本カラーは紅色。

ファイナルベントの技は、エビルダイバーに乗って敵に体当りをする「ハイドベノン」。

第十一章・乱戦開始（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十一章・乱戦開始

ここはミラーワールド。
龍騎とシザースの戦いに、ナイトとライアが参戦したところだった。

「おいおい！３ＶＳ１かよ！きたね～ぞ！」

シザースの指摘に、ナイトが答える。
「心配するな・・。俺は・・、龍騎（そいつ）を倒しにきただけだ！」
ナイトは龍騎を指差してそう言うと、ダークバイザーを片手に、龍騎に突進した。

「お、おい！太郎！！」
龍騎はナイトの攻撃を、ドラグセイバーでギリギリ防ぐ。

「おいおい、あっちはあっちで始めちまったぜ～。・・、俺らもいっちょ闘（や）るか？」
シザースは、ナイトと龍騎の攻防戦を眺めながら、ライアに言った。

「いやいや、戦いは好きじゃなくてね・・・」
ライアは笑いながら言う。

「チッ！どいつもこいつも・・、ふざけすぎだよ！戦え！」
堪忍袋の緒が切れたのか、シザースはライアに飛び掛った。

「おっと！」
ライアは、シザースの猛攻を、次々とかわしていく。
そのころ、ナイトと龍騎は鍔競り合いとなっていた。

「お前を倒す！そして俺は、日本に帰るんだ！」
ナイトがダークバイザーに力をかける。
「グッ・・。お、俺は、戦いを・・、と、止めるんだ！！」
龍騎は一気に押し返す。

「しょうがないか・・」
そう言うと、ナイトはカードをベントインした。
「ソードベント」
ナイトがウィングランサーを装備した。

それを目撃したライアは、呟いた。
「おっ！いいタイミングだ」
ライアはカードを、左腕にあるエイ型の召喚機「エビルバイザー」にベントインした。
「コピーベント」
すると、ナイトのウィングランサーが、ライアのもとにコピーされた。

「このやろ！ずるいことしやがって！」
シザースは叫ぶが、ライアは軽いノリで答える。
「ずるい？心配すんな！俺はお前を殺さないから！」
「そういう問題じゃね～んだよ！」
またしても叫ぶと、シザースはライアに飛び掛った。
しかし、それを簡単に防ぐと、ライアは反撃にでた。
「とりゃ！ハッ！タアァァ！」

「うわぁ～！」
シザースは吹き飛び、木にぶつかる。
「へっ、なかなかやるな！」
シザースはゆっくりと立ち上がると、ライアに再度、飛び掛った。
しかし、ライアはそれを避けると、隙だらけの背中に、重い一撃を与えた。
「ぐわぁ～！」
シザースはまたしても吹き飛び、別の木にぶつかる。
「ははっ！お、お前のこと、見くびってたよ・・」
シザースは、息をきらしながら、言った。
「そう？ありがと」
ライアは、シザースが追い詰められていることを知っていながら、涼しげな態度をとる。
彼らの十メートルほど離れたところで、ナイトと龍騎はにらみ合いを続けていた。
「おい！あっちはそろそろ、決着がつきそうだな」
ナイトの言葉に、龍騎は強めの口調で答える。
「こっちは永久に決着なんてつかないぞ！俺は戦わないんだからな！」
龍騎がそこまで言ったとき、シザースが彼の真横に吹っ飛んできた。
「クッ！な、なんて強さだ！」

シザースが震えながら言う。

「いや、お前が弱いんだよ！」

そう言うと、ライアはウィングランサーを構えた。

「終わりだ！」

ライアがウィングランサーを、シザースの喉元めがけて突き出した。

シザースは小さく悲鳴をあげた。

おそらく、恐怖から目をつむったのだろう。

数秒して、目を開けたのであろう、シザースが呟いた。

「えっ・・」

ライアはシザースに、止めを刺してはいなかった。

ウィングランサーは、彼の喉の寸前で停止している。

「言ったでしょ？俺は、お前に、止めは刺さないって！」

そう言うと、ライアはシザースに背を向け、歩き去った。

ことの一部始終を目撃し、シザースの無事を、心から喜んだ龍騎だったが、突然、ついさっき自分を襲った悪夢が、脳裏をよぎる。

「聡、危ない！近藤はお前をまだ・・・」

龍騎の言葉を、シザースがさえぎった。

「遅い！」

シザースはそう叫びながら、ライアを背後から急襲した。

「ぐわぁ～！」

さっきとは対照的に、シザースの攻撃で、ライアが吹き飛ぶ。

「ハハハハハ！この『プログラム』で、「情け」は禁物だぜ～！」

シザースはそう言うと、ライアに飛び掛った。

しかし、そのとき、シザースの体が粒子化しだした。

「チッ！時間切れか・・」

シザースはそう言い残すと、現実世界へと帰っていった・・・。

第十一章・乱戦開始（後書き）

その他の情報？
無人島（むじんとう）
今年、『プログラム』が行われる地。
具体的な面積は、淡路島の約１．２倍。
東西には、浜辺が何キロか続いているが、北と南は崖しかなく、そこから海に転落すると、命は無い。

第十二章・それぞれの思惑（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十二章・それぞれの思惑

シザースの猛攻を受け、地に伏していたライアが、ゆっくりと立ち上がる。

龍騎はよろめく彼に走りより、肩をかした。

「大丈夫か？シザース（こんどう）の奴、ひどいことするよな・・」

ライアは、助けようとする龍騎を、広げた手のひらを突き出して止めながら言う。

「俺は大丈夫だよ。それより・・、かわいそうなのは近藤だ。あいつも、『プログラム』の被害者だからな・・」

龍騎はその意見には賛成だった。

近藤という男は、確かに要領がよく、嫌味な奴だが、人を平気で攻撃するような人間ではなかった。

『プログラム』が、彼を変えたのだ。

「・・いや、近藤だけじゃない・・・」

龍騎は、自分の背後にいるナイト（しんゆう）のほうに、振り向きながら呟く。

ライアは、自分達の話は聞こえていないようだが、こちらを見つめているナイトを一瞬見て、龍騎に視線を戻しながら言う。

「ああ、あいつもそうだな・・・」

「あっ」

龍騎が、自分の体の粒子化に気づき、声をあげた。

「お前も時間切れだな、さき帰れ」

ライアはそういうと、ナイトを見つめ、呟く。
「俺は、やらなきゃならないことがある・・・」
現実世界にむかって歩き出した龍騎だったが、立ち止まり、ライアに話し掛ける。
「そうだ、言い忘れてた！昨日、俺を助けてくれたのは、聡、お前だったんだな！ありがと！」
「どういたしまして！」
ライアは、また現実世界へ歩き出した龍騎の背中を見つめながら、答えた。
その頃、現実世界では、ライアを追い詰めておきながら、止めをさせなかった近藤と、彼を子分としている山内、龍騎（けんじ）がミラーワールドから帰還するのを待っている浩二が、話していた。
「チッ！あと十秒あれば、松山を殺せたのに！」
「いやいや、何千年戦っても、お前は誰にも勝てないよ」
ライアを仕留められなかったことを悔しがる近藤を、浩二が挑発する。
「なんだと！？変身も出来ないくせに、調子に乗るな！」
近藤が言い返す。
「残念だな・・。俺も一度、戦っておこうと・・・思ったのに・・」
山内が会話に割ってはいる。
「ああ、さっきカードデッキ持ってたな」
浩二はあごに指をあてながら、呟く。

「でも、戦い終わったし、規格外の戦闘力を示せなかったね・・」
「フッ・・、俺の力を、信じてないのになにを言う・・」
山内は笑みを浮かべながら言う。
浩二がさらに皮肉を言おうと、口をひらいたとき、ミラーワールドから憲司が飛び出してきた。
「どぅあ！」
憲司は地面に頭をぶつけ、悲鳴をあげる。
「いっつ～。・・・、あれ？えっと・・、なんか邪魔した？」
憲司は、目の前にいる三人の表情をみて、なんとなく状況を理解し、恐る恐る聞いた。
「い～や、ないすたいみんぐ～！」
浩二はわざとらしく喋る。
「やっぱり邪魔したか・・」
憲司は苦笑いをしながら立ち上がる。
龍騎（けんじ）が去ったミラーワールドで、ライアがナイトに話し掛けていた。
「おい、憲司を攻撃するなんて、どういうつもりだ？」
声を荒げるライアから顔をそらしながら、ナイトは言う。
「俺以外の参加者は、全員敵だ！今現在は手を組んでるお前も、な」
「そうか・・。でも、俺はお前の敵じゃないからな！」
ライアは笑いながら言う。

「おれは・・」
ナイトはそこまで言うと、その場を後にした。
「これ以上戦うことはない！俺達は行くぜ」
現実世界では、憲司が山内と近藤に自分の意志を伝えているところだった。
「勝手に・・、しろ・・」
山内は笑みを浮かべながら言った。
「ああ、そうするよ！行くぞ、浩二！」
憲司は声を荒げてそう言うと、浩二と一緒に森の中に消えた。
山内と近藤も、顔を見合わせ、不敵な笑みを浮かべると、森に消えた。
憲司達が、山内と近藤のまえから消えてから、二時間ほどが経った。
「おいおい、ここどこだよ～！」
完全に道に迷った憲司が、浩二に涙目で言う。
「う～ん、どこだろ？自分で考えて！」
「はあ？もう、勘弁してくれよ～！」
浩二の無責任な答えに、憲司はますます泣きそうになっていた。
そのとき、憲司の数メートル先を行く、浩二の前方で物音がした。
「おい・・、なんだよ」
憲司が冷静さを取り戻しながら言う。

物音がした方向にある、大きな木の陰から、意外な人物が現れた。

「聡？」

憲司の呟きに、聡は笑みを浮かべ言った。

「どうも！俺を仲間に入れてくれない？」

その頃、山内のまえにも、意外な人物が現れていた。

「坂下！？」

動揺した近藤に、太郎は険しい表情で呟く。

「俺と・・・、手を組まないか？」

『プログラム』開始四日目の夕方、山内は笑みを浮かべ、憲司は口が半開きになっていた・・・。

第十二章・それぞれの思惑（後書き）

その他の情報？

本部（ほんぶ）

『プログラム』が行われる無人島の中心にある、島で最大の施設。

白い外見で、プログラム開始と同時に完全封鎖される。

その後は、自衛隊の特殊部隊が配備され、半径１０ｍ以内に立ち入ったものを容赦無く狙撃する。

第十三章・失われた命（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十三章・失われた命

『プログラム』開始から、十日が経った。
戦闘は激化し、参加者も『プログラム』開始時のおよそ六割にまで減った。
戦いを止めたい憲司、浩二、聡の三人は、次々と命が奪われていく現状に、心を痛めていた。
一方、近藤、太郎と行動している山内は、ある計画を練っていた。

「・・・俺やっぱり、戦いたくない！」
ここは島の中心から、少し北のところ。
「仮面ライダーガイ」である「小森（こもり）　隆一（りゅういち）」が、「仮面ライダーベルデ」である「河野（こうの）　章介（しょうすけ）」に、自分の胸のうちを明かしているところだった。
「なんだと？」
河野が小森を睨みつける。
「俺、ここ数日で何人もの友達を殺してきた。・・この罪が、消えるとは思ってないけど・・・、これ以上人を殺すのは嫌なんだ！」
小森が涙を流しながら言う。
「じゃあどうする？誰とも戦わないで、どうやって生き残る！？」
河野が小森の胸倉を掴んで怒鳴る。
「・・・憲司・・」
小森が呟く。
「ほら！憲司がこの前、「戦う気は無い！」って言ってたよね！あいつと合流すれば・・・」
「もういい！合流すりゃいいだろ！一人でな！！」
小森の言葉をさえぎり、河野が怒鳴る。
「一人って・・・」
小森は顔を曇らせる。

「さあ、いけよ！・・・、あばよ・・」
そう言い残すと、河野は森の中へ消えていった。

その頃、島の最北端にある大きな廃墟で、大変な事態が起ころうとしていた。

廃墟のなかを、山内と近藤、そして太郎が歩いている。
「・・・待て！」
山内は珍しく声を荒げると、笑みを浮かべた。
彼の目の前には、偶然廃墟を通りかかった、憲司、浩二、聡がいたのだ。
「あ！山内！！お前・・って、なんで太郎が！？」
山内の後ろに太郎がいることに気づき、憲司達は動揺する。
一方、太郎も聡が憲司といることに驚いていた。
「松山・・・」
そう呟いた太郎を押しのけ、近藤が憲司の前に歩み出てきた。
「今度こそ、決着をつけてやる！」
近藤の言葉に、憲司が顔をしかめたその時、山内達の背後で声がした。

「ま、待てよ！」
単独行動を決めた河野を、小森が追いかけてきたのだ。
「お、俺は、お前と別行動がしたかったわけじゃない・・ん・・だよ！」
息も絶え絶えの小森に、河野が怒鳴る。
「俺が嫌なんだよ！お前なんかと・・・」
河野がいきなり黙り込み、小森が不安がる。
「ど、どうしたんだよ？」
「憲司に・・、山内か！」
河野は憲司達に気づき、黙り込んだのだった。

「あ！憲司！なんでここに？」
小森の質問に、憲司が答えようとしたとき、河野がそれをさえぎった。
「そんなことはどうでもいい！勝負だ！！」
河野の言葉に、近藤と太郎はカードデッキをだし、山内は笑みを浮かべた。

近藤、太郎、河野は、大きな廃墟の大きな壁に設置された、大きな鏡にカードデッキを向け、叫んだ。
「変身！！」

さらに、河野を追うため小森が、戦いを止めるため聡が、変身してミラーワールドへ飛び込んだ。

「あのなぁ～、さっきから二度も人の会話中断しやがって！！今度は邪魔させないぞ！よく聞け！！俺は・・、戦いを止める！！・・・・以上です・・」
取り残された憲司はそう言うと、カードデッキを鏡に向けた。
「変身！！」

そして、ミラーワールドへ飛び込む龍騎の後姿を見つめていた山内は、不気味な笑みを浮かべながら、言った。
「・・・、変身！」

現実世界に一人残った浩二は予感していた。
なにか、なにか大変な事が起こるという、予感を・・・。

第十三章・失われた命（後書き）

その他の情報？

廃墟（はいきょ）

『プログラム』が行われる無人島の最北端にある、巨大な廃墟。

コンクリートの壁は所々崩壊しており、天井も抜け落ちているが、

元は工場だった模様。

憲司、浩二、聡と、山内、近藤、太郎と、河野、小森の三勢力が戦

ったのもここ。

第十四章・壮絶な戦い（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十四章・壮絶な戦い

浩二は島の最北端にある廃墟に一人たたずみ、眼前の鏡をみつめていた。
浩二の視線の先には、向かい合う龍騎とシザースがいた。

「かかってこいよ！」
シザースの挑発に、龍騎は答えた。
「ああ・・、俺は人殺しじゃない・・。でも、お前は一回ボコボコにしたほうがよさそうだな！！」
そう言うと、龍騎はシザースに飛び掛った。

廃墟のさびついた階段の踊り場で、眼下の龍騎をみつめるナイトに、ライアが話し掛けた。
「おい、お前は戦わないのか？」
「フッ、襲い掛かったら、お前は反撃するか？」
「う～ん・・・、し・・な・・い・・で・・・しょうね」
ライアは考え込むふりをしながら答えた。
「まあ、俺も戦わないとは言ってないがな！」
ナイトはそう言うと、ライアに攻撃を仕掛けた。

少し離れたところで戦っている龍騎やナイトをみつめ、ベルデが言った。
「よし、全員、俺が倒してやる！」
「ま、待ってよ！」
走り出しかけたベルデを、ガイが呼び止めた。
「なんだよ！」
ベルデが声を荒げた。
「そ、その、やっぱりやめないか？」

「やめないよ！お前はここでぼ～っとしてろ！」
ベルデはそう言うと、ガイに背を向け、龍騎のほうへ走っていった。
廃墟の、コンクリートで作られた高台から、龍騎やナイトの戦いを眺めている者がいる。
山内＝仮面ライダー王蛇だ。

龍騎とシザースのほうに走っているベルデの前に、王蛇が高台から飛び降りてきた。
「お、お前は！？」
「河野・・・」
「や、山内か！？」
「後ろを見てみろ・・・」
ベルデが振る向くと、ガイがたたずんでいた。
ナイトとライアの戦いをみているため、こちらには気づいていないようだった。
「なんだよ！」
「・・お前は・・・、非情に戦うつもりらしいが・・・、奴を倒すつもりはないのか？」
「奴って・・、小森か！？」
「哀れだな・・・。いくら友人を殺しても・・、一番の親友は殺せないでいる・・・」
「そ、それは・・」
「小森を倒せなければ・・・、俺は倒せない・・・」
「・・・」
ベルデはすっかり黙り込んでいる。
「さあ・・・、倒せ！奴を・・、小森を倒せ！！」
「俺は・・・・、うおおおぉぉ！！」
ベルデは叫ぶと、ガイのほうへ走っていった。

「な、なんだよ！」
ガイの言葉を無視し、ベルデはベントインした。
「ホールドベント」
バイオワインダーを装備し、それで何度もガイを攻撃するベルデ。
「グワッ！うぅ・・」
ガイは何度も吹き飛び、肩で息をしている。
「うおおおぉぉぉ！！」
ベルデはさらに攻撃を続ける。
「クッ！」
ガイはカードを、左肩アーマー前部に取り付けられている召喚機「メタルバイザー」にベントインした。
「ストライクベント」
ガイは、装備した契約モンスターの頭部を模したメタルホーンで、ベルデを攻撃した。
「グワッ！」
ベルデは吹き飛んだ。
「ご、ごめん！」
ガイは正当防衛だったものの、親友を攻撃してしまった罪悪感から、ベルデに近寄った。
しかし、その判断は間違いだった。
「ファイナルベント」
「えっ？」
ガイが呟いた瞬間、ベルデの契約モンスター「バイオグリーザ」が現れ、ベルデの足を舌でつかみ、空中から振り子の要領でガイに突撃させた。
ガイの両足を掴んだベルデは、ガイの頭を地面に激突させた。
ベルデがガイから手を離すと、ガイは地面に倒れこんだ。
「悪いな・・・。俺は、お前を倒さなきゃ、先にすすめないんだよ・・」
ガイの変身が解除される。

口から血を流して、小森は意外な言葉を呟いた。
「よかっ・・た・・・」
「は？」
ベルデは思わず呟く。
「お、お・・れが・・・、いる・・せいで・・、お前が・・・、戦えなく・・、なるくらいなら、・・お・・、おれは・・、いないほうが・・、い、いい・・」
「お、おい・・、なに言ってんだよ！俺は・・」
「おれ・・の・・、ぶんまで・・、生きて・・・、い、いき・・て・・・、くれ・・・」
ベルデは、自分のしたことに、気づいた。
「小森・・、死ぬな！お・・、俺は・・・」
「頑張れよ・・・・・」
小森は目を閉じ、静かに息を引き取った。
「お、お、お・・、俺は・・・。う・・、うわああぁぁ！！」

「ファイナルベント」
泣き叫んだベルデの背後で、音声がした。
王蛇の連続蹴りをくらったベルデは、大きく吹っ飛んだ。
地面に倒れこんだベルデは、ゆっくりと立ち上がり、粒子化しだした小森のほうを見ながら、呟いた。
「小森・・・」
ベルデは全身から力が抜けた瞬間、大爆発した。

それを見ていた龍騎は、呟いた。
「な、何だよ、あれ・・。なんで・・・」
「河野は弱い男だ・・・。ちょっと挑発したら・・、すぐに友を殺し、挙句の果てに、自分に絶望した。フッ・・、背中ががら空きだ・・・」
動揺する龍騎に、王蛇が解説をした。

「・・てことは・・・、お前がけしかけたのか！お前が～！！」
「・・俺のはアドバイス、殺(や)ったのは河野だ」
「なにがアドバイスだ！お前、挑発したって言ったじゃないか！！」
「・・・まあな」
「調子のんな！！」

龍騎はシザースを跳ね除けると、王蛇に突撃していった。
王蛇は龍騎の攻撃をかわすと、自身の契約モンスター「ベノスネーカー」の尾を模した黄金の突撃剣・ベノサーベルで、龍騎を攻撃した。
「うわ～！」
龍騎は背中を攻撃され、数歩進んで倒れこんだ。
「くそっ！」
龍騎は立ち上がり、反撃を試みるが、さらに攻撃され、吹っ飛んだ。
「グワッ！」
龍騎は地面に突っ込み、そのまま地下に消えた。
おそらく、廃墟が工場だった頃に使っていた、地下倉庫に落ちたのだろう。
「・・、終わったな・・・」
王蛇はそう呟き、シザースのほうへゆっくりと歩き出した。
「ストライクベント」
王蛇の背後で音声がし、火球が突っ込んできた。
「グッ！」
とっさにベノサーベルで防いだものの、王蛇は少し後退した。
「チッ！」
王蛇は舌打ちし、地下から這い上がってきた龍騎に突撃していった。

「へ～、珍しく燃えてんじゃん」
シザースは王蛇と龍騎の戦いを眺めながら、呟いた。
「まあ、龍騎(あいつ)じゃ勝てないな、山内には」

シザースの読みどおり、龍騎は数分の攻防の末、地面に倒れこんだ。

「・・弱いな、・・お前も河野の同類だ・・・」

王蛇はそう呟くと、シザースとナイトを呼び、ミラーワールドを後にした。

去っていくナイトの後姿に、龍騎が問い掛けた。

「太郎！お前は・・・、お前はそんな奴と一緒に・・、仲間なのか！！？」

ナイトは一瞬動きを止めるが、すぐに歩き出した。

王蛇、シザース、ナイトが去ったミラーワールドで、龍騎は泣き崩れた・・・。

第十四章・壮絶な戦い（後書き）

仮面ライダーファイル？
仮面ライダー王蛇
山内闘樹が変身する仮面ライダー。基本カラーは紫。
ファイナルベントの技は、空中からベノスネーカーの毒液の勢いを乗せて放つ必殺の連続蹴り「ベノクラッシュ」。

第十五章・激変する戦況（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十五章・激変する戦況

ミラーワールドで泣き崩れる龍騎に、ライアが近づいてきた。
「・・・山内も狡猾だな・・・。河野は・・、いや、河野だけじゃない。『プログラム』で二人組みがいたら、そいつらは親友、恋仲、・・あと、双子の兄弟とかか・・。なんにしろ、親しい仲のはずだ・・・。そして、そういう二人組みに起こる一番の問題は、お互いが、自分が戦いで非情に徹しきれない一番の理由だということ・・・。双方が思ってなくても、どちらかは絶対に思う。それを山内は利用したんだ・・・」

龍騎は、自分の肩におかれたライアの手をどけ、よたよたと現実世界に戻っていった。

「憲司!!」
浩二が憲司に駆け寄ってきた。
「け、憲司・・・。その・・、残念だ・・・」
「ああ・・・・」
憲司はそっけない返事をし、ゆっくりと歩き出した。
浩二の肩を、聡がたたいた。
「憲司には、『プログラム』の現実はつらすぎる・・」
「そうだね・・・」
浩二は顔を曇らせて続ける。
「でも、憲司なら、それもこれも全部、何とかしてくれる気がする。そう、思いたい・・・」
「・・・だな」
聡は、憲司の後姿を見つめながら言った。

ここは島のほぼ中央の森の中。

山内が先頭、それに近藤、そして太郎が続いていた。
「・・・なあ」
近藤が振り返って太郎に話し掛ける。
「・・・・なんだ」
太郎は近藤を睨みつける。
「いやな、お前が俺らの味方するの、迷ってんじゃねえかって、心配になってな～」
近藤は不自然な笑みを浮かべながら言う。
「フッ・・、お前の“味方”になった覚えは無い。俺は、行動してるだけだ。・・・一緒にな」
「ああ、そうかよ！」
近藤は不機嫌そうに、舌打ちした。
「“味方ではない”か・・・」
山内は、小さな声で呟いた。

島の最北端での激闘から、三日が経った。

憲司達は島の北西で、しばらく様子をみることにした。

山内達は、島の南西で、他の参加者を次々消していた。
しかし、殺(や)るのは近藤と山内だけで、太郎は追い詰めても、止めを刺す機会が“たまたま”なかった。

夜、山内は近くの滝に水浴びに行っている。
太郎は今しかないと思い、寝袋を抜け出し、森の中へ消えようとした。
しかし、太郎の前に、近藤が現れた。
「よお！こんな夜中に・・・、お散歩か？」
近藤はまた、不自然な笑みを浮かべている。
「・・・お前らとは一緒に戦えない。最初は・・、山内といれば非

情に徹しられると思ったが、俺は幸せにも、アマちゃんだったらしい・・」
「へっ、自虐ネタか。・・お前、それが遺言になってもいいのか？」
そう言うと、近藤はカードデッキを取り出した。
「やっぱりそれか・・・」
太郎もカードデッキを取り出すと、叫んだ。
「変身！」
「変身！」
近藤も叫び、二人は、シザースとナイトは鏡に飛び込んだ。

「ソードベント」
ナイトは二刀流でシザースを攻める。
「ケッ！」
「ストライクベント」
シザースも反撃し、一進一退の攻防戦が続いた。
ナイトがシザースの懐にもぐりこもうとしたとき、ボルキャンサーが現れ、ナイトを急襲した。
「ずるいぞ！」
「じゃあどうした！！」
シザースは開き直る。
「なら・・・」
「ナスティベント」
ナイトの契約モンスター「ダークウイング」が飛来し、超音波攻撃を仕掛けた。
「グワッ！！」
シザースは耳をおさえて倒れこむ。
「ず・・、ずるいぞ！」
「ハッ！じゃあどうした！！」
ナイトはシザースにウィングランサーを突き刺しかけたが、思いとどまり、ミラーワールドをあとにした。

「クッ！なんなんだ！なんなんだよ、あいつは！！俺は・・・・」
そこまで言って、現実世界に戻った近藤は言葉を失う。
それは恐怖からだった。
近藤のまえには、彼に冷たい視線をおくる、山内だった・・・・。

第十五章・激変する戦況（後書き）

その他の情報？
コウジージョーク
浩二の口から発せられる、キツかったり、わかりにくいジョークの総称。
浩二曰く、「頭のいい奴にしかウケない」そうで、憲司はたいてい苦笑いしている。

第十六章・暗躍する男（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十六章・暗躍する男

「ち、違う！お、俺は隙をつかれて・・・」
近藤は言い訳するが、山内は眉ひとつ動かさない。
「違う！お・・れは！」
近藤の言葉をさえぎり、山内は言った。
「・・・哀れな・・・」
近藤は、思わずかたまった。
「愚かな人間に説教するほど、俺は暇じゃないんでな・・・」
そう言うと、山内は移動の準備を始めた。
近藤はしばらく立ち尽くしていたが、山内にこないのか聞かれ、慌てて後を追いかけていった。

「まったく！さっきから何人のライダーから逃げてる！？」
憲司がイライラしながら言った。
「さあ・・、十人くらい？」
浩二が言った。
「じゅう・・にん？・・・バカか？お前バカか？そんなカワイイもんじゃねぇ！」
憲司は逃げ回る生活に、爆発寸前だ。
「でも、逃げる以外にないだろ、今は」
聡が笑いながら言った。
「・・・それは・・・」
憲司は黙り込んだ。

その夜、聡は眠れないので、偵察を兼ねた散歩に行った。
しばらく歩くと、土が盛り上がっている場所を見つけた。
生い茂る草を手でどけると、そこには地下へ続く階段があった。

聡は意を決して、階段を下りていった。
しばらくいくと、大きな広間へでた。
そこには、割れた鏡が数え切れないほどあった。
聡は奥へ進み、一番奥の大きな鏡の前で立ち止まった。
聡が鏡に触れようとしたそのとき、背後から声がした。
「なんだ？」
聡は振り返るが、そこには誰もいない。
あたりを見回すと、聡の左前方にある鏡のなかに、男が立っていた。
二十代だろうか。
「・・・何者だ？」
男は答えない。
「なるほど・・・。黙秘権ですか？」
聡は笑ってみせるが、男はそれを無視し、一言だけ言った。
「戦え」
「はい？」
聡は大げさな身振りで言う。
「お前は戦っていない。誰も殺していない。戦え」
「嫌だといったら？」
聡の問いに、男はカードを投げつけることで答えた。
聡はカードを受け取ると、それを見ながら言った。
「こんなの使わないよ」
「それはお前の自由だ」
「あっそ」

そう言いながら聡が顔を上げると、鏡には自分だけが映っていた・・・。

第十六章・暗躍する男（後書き）

その他の情報？
地下の鏡広間
聡が偶然発見した地下室。
聡はその存在を誰にも教えないが、後に憲司もみつけることとなる。
実は、仮面ライダー誕生の秘密が隠されている。

第十七章・狙われた憲司（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十七章・狙われた憲司

朝。
聡は昨夜のことを思い出して、パンをかじった。
ポケットから謎の男に渡されたカードを取り出し、見つめた。
「・・・」
聡はカードをしまうと、立ち上がり、歩き出した。

「おい、どこ行くんだ？」
それに気づいた憲司が聞いた。
「ああ、ちょっと散歩に・・・」
しかし、憲司が言う。
「そんな時間ないよ！今日は行くところがあるんだから」
聡は憲司に気づかれないようにため息をつくと、精一杯の作り笑いで言った。
「そうか！じゃあ、今日は我慢するよ！」

そのやりとりを見ていた浩二は、考え込むように聡を見た。

ここは島の本部の正門。
あごにひげを蓄えた、厳格な風貌の中年の男が歩いている。
「崎原さん！ご苦労様です！」
そう言った門番の自衛隊員に、崎原は歩みを止めずに敬礼し、本部に入っていった。

本部の、その大きさに対し、あまりにも小さすぎる入り口で暗証番号を入力すると、中に入った。
『プログラム』開始前、憲司達が集められた体育館のような広間を奥まで歩いていくと、螺旋階段をあがり、鉄製のドアの前にくると、

また暗証番号を入力し、中に入った。

中に入ると、数台あるモニターのなかで、一番大きいモニターの前にすわり、電源を入れた。
モニターに映像が映し出されると、そこには現在の内閣総理大臣「神埼　宗太郎」がいた。

「総理、おはようございます」
崎原が頭を下げながら言った。
「あ、ああ、おはよう・・・」
神埼総理は、弱弱しく言った。
「あ、あと・・・その・・つまり・・・、生き残りは、ど、どのくらい？」
「残り１８人です」
崎原は顔を上げて言った。
「そ、そう・・・」
総理とは対照的に、崎原は冷静に、かつ、事務的に言った。
「一人問題児がおります」
「だ、誰だい？」
崎原は懐から、資料のようなものを取り出し、それを見ながら言った。
「上井憲司という男です」
「そ、それで？」
「ええ、実は上井は、誰も殺していないのです。さらに、本当なら死んでいた、偶然助かった友人と行動しているのです」
「な、なるほど・・・。で、でも、その友達は死んでないんだし、問題ないのでは？」
「いいえ！」
崎原は総理をにらみつけた。
「な、なぜ？」

崎原は立ち上がると話し出した。
「いいですか、上井の友人は変身できないんですよ！他の参加者達も、生身の人間を殺すのには躊躇する。すると、最後に二人以上生き残る可能性があがります。実力で勝ち残った者、情けで生き残った者。参加権はないが、生き残りは生き残りだ。今年は全員脱落ということになる。そういうルールですからね」
崎原はモニターに近づき、言った。
「でも、生き残りなしじゃ意味がない。それは分かっているはずです、総理」
「あ、ああ・・」
総理はしばらく黙り込み、口を開いた。
「じゃあ・・・、友達は・・・その・・腕輪を・・ば、爆破すれば・・その・・・」
「たしかに！片付きます。しかし、それではいっしょに行動している上井が巻き込まれるかもしれません。それはそれで問題です」
「そうだね・・・」
総理はまた黙り込み、しばらくして言った。
「じゃあ、う、うえいくんが死ねば、友達も・・・その・・、始末というか・・・」
「そうですね・・・。しかし、あの男、中々の実力の持ち主でして・・・」
「そ、そう・・・」
数秒の沈黙のあと、今度は崎原が先に口を開いた。
「総理、私に考えがないとでも？」
崎原は総理に何かを伝え、モニターの電源を切ると、鉄製のドアから出て行った・・・。

第十七章・狙われた憲司（後書き）

キャラクターファイル？

崎原　正行（さきはら　まさゆき）

３６歳。政府関係者。

あごにひげを蓄えた、厳格な風貌の男。

現総理の補佐役を務めるが、『プログラム』の存在理由についても、

何か知っている模様。

第十八章・始まった計画（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十八章・始まった計画

本部を出た崎原は、しばらく歩き、木を切り倒し作られた広場へ向かった。

広場は雑草が刈られ、原始的な島で、本部についで人工的だった。
中心には、装飾がなされた大きな鏡が設置されていた。
鏡は、参加者(てき)を倒した参加者に与えられる褒美のモンスターが現れる鏡だった。

鏡の前には、山内と近藤がいた。

「やあ、山内君」
崎原は山内に言った。
山内は振り返ると、崎原をにらみつけた。
「・・・その声・・・、最初のアナウンスか・・・」
崎原は、総理と話したときとは対照的に、笑顔で言った。
「なあ、君に話があるんだ」
「なんだ？」
「上井憲司を・・・知ってるかね？」
崎原の問いに、山内は不気味に微笑んだ。
「ああ、・・・よく」
「そうか・・・。なら君に頼みたいことがあるんだ」
黙って自分を睨む山内に、崎原は言った。
「憲司君を・・・殺してくれる？」
近藤は目を見開いて驚いた。
しかし、山内は顔色を変えず、言った。
「『プログラム』とは、そういうものでは？」

崎原は山内に背を向け、広場の出口に向かいながら言った。
「じゃあ、頼んだよ。・・・5日で殺せ」
さっきとは違い、事務的に言う崎原を見つめ、山内は笑った。

「こっち、こっち！」
憲司に手招きされ、浩二と聡は、古びた小屋の入り口へとやってきた。

島の北西部の森のなかにたたずむ小屋は、つたの絡まった壁、塗装のはがれた屋根、割れた窓など、「廃墟」の条件をすべて満たしていた。

「なあ、・・こ、これは・・・」
聡は苦笑いした。
「ここな、偶然見つけたんだよ！」
「いつ？」
浩二が聞いた。
「お前と会う前！」
「近藤と戦った屋敷も、そうじゃなかった？」
浩二が言った。
「あれもそう！で、ここもそう！」
「結構注意深いんだな・・・」
聡がまた苦笑いした。
「そう？それより、どう？」
「どうって？」
浩二がウンザリしたように聞いた。
「俺らの基地にしないか？」
「小学生か・・・」
聡が呟いた。
「へ？」

「いや、何も・・・」
聡は満面の笑みで言った。
「じゃあ、入ろう！」
憲司は動揺する聡と浩二を小屋に押し込んだ。

「ほら、どうよ？」
小屋の中は、外見に比べ、きれいだった。
「おお・・・」
聡は驚いたように呟いた。
「な、いいだろ？」
憲司に聞かれ、聡はうなずいた。
「見た目よりはいいな・・・」
しかし、部屋の隅に蜘蛛の巣を見つけた浩二は言った。
「やだよ、虫嫌いだし・・・」
ご機嫌斜めの浩二に、憲司は言った。
「大丈夫！俺が掃除してやるよ！」
憲司はそう言うと、聡と浩二を追い出した。

「もう！自分が入れといて、今度は追い出すとは・・・」
「まあ、まあ。憲司が掃除してくれるなんて、うれしいじゃないか」
聡はイライラしている浩二に言った。
「聡は優しすぎだよ・・・」
浩二はそう言うと、歩き出した。
「どこ行くんだ？」
「散歩！」

一人取り残された聡は、近くの切り株に座った。
聡は浩二が帰ってきていないか確認すると、ポケットからカードを取り出した。
謎の男から渡されたカードだ。

「誰だ？あの鏡男・・・」

聡がそう呟いた直後、聡の背後で声がした。

「おい」

聡が振り返ると、そこには太郎がいた・・・。

第十八章・始まった計画（後書き）

キャラクターファイル？
小森（こもり）　隆一（りゅういち）
１５歳。２０ＸＸ年度の高代中学校３年４組。
明るい性格で、お調子者だが、心優しく、友達を大切に思っている。
『プログラム』参加中は、友人である河野と行動した。

仮面ライダーファイル？
仮面ライダーガイ
小森隆一が変身する仮面ライダー。基本カラーは銀。
ファイナルベントの技は、メタルホーンを装備した状態でメタルゲラスの肩に乗り、高速で突進して標的を粉砕する「ヘビープレッシャー」。

第十九章・死への予感（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第十九章・死への予感

「・・・太郎」
聡は、自身の背後に立つ太郎に言った。
「・・・上井と浩二もいるのか・・・」
太郎は首を傾け、小屋の中の憲司を見つめ言った。
「どうした？突然来て・・・」
太郎は、聡の質問に答えない。
「おいおい！完全無視はやめろ。腕二本分ぐらいしか離れてないだろ」
聡は笑ってみせた。
「ちょっとな・・・」
聡はしばらく太郎を眺め、言った。
「山内とは・・・別れたのか？」
「ああ・・・」
太郎はされたくなかった質問をされ、一瞬眉間にしわを寄せた。
「そ！よかった！俺の計画どおり」
聡は、かけてもいない眼鏡を、指であげるしぐさをした。

しばらくの沈黙のあと、聡が静かに言った。
「これやるわ。お前に」
聡は持っていたカードを、太郎に差し出した。
「なんだ？このカード」
聡は微笑んでいった。
「さあ、俺も知らない」
「さ、行くか」

聡は立ち上がると、木片がついた尻をはたき、言った。
「えっ・・・、どこへ？」
太郎は驚いて聞いた。
「ああ、ちょっと・・・ね」
聡は太郎に微笑みかけると、ゆっくりと森の中へ消えた。
太郎はしばらく切り株の横で立っていたが、カードをしまうと、きた道を引き返した。

ここはミラーワールド。
王蛇が参加者を打ちのめしていた。
「上井は・・・どこだ・・・」
「し、知らない！」
参加者の少年は、変身が解け、血だらけで地面に倒れこんでいた。
「そうか・・・。なら・・・死ね・・」
参加者は涙を流し、言った。
「そ、そういえば・・・一昨日見た！」
「嘘だろう？」
王蛇は静かに言った。
「ち、違う！見た！見た！北！北のほうへ行った！！」
参加者は泣き叫ぶ。
「・・・そうか」
王蛇はそう言うと、自身の契約モンスターに捕食される参加者を尻目に、現実世界へ戻った。

「よし！！」
憲司は、すっかりきれいになった小屋の前で、言った。
「どうよ！これはすごい！！もう、別荘っていうの？ロッジ的な？」
憲司は一通り喋ると、周囲を見回した。
「・・・で、あいつらは？」
憲司は薄暗くなってきた森の中で、一人取り残された・・・。

第十九章・死への予感（後書き）

キャラクターファイル？
河野（こうの）　章介（しょうすけ）
１５歳。２０ＸＸ年度の高代中学校３年４組。
典型的な不良で、山内とも親交がある。
『プログラム』参加中は、小森と行動した。

仮面ライダーファイル？
仮面ライダーベルデ
河野章介が変身する仮面ライダー。基本カラーは黄緑。
ファイナルベントの技は、バイオグリーザがベルデの足に舌を巻き付け、振り子の要領で標的を捕え、パイルドライバーの要領で標的の頭を地面に激突させる「デスバニッシュ」。

第二十章・犠牲と思い（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第二十章・犠牲と思い

「浩二～！聡～！」
憲司は森の中を走り回っていた。

「お～い！」
憲司は立ち止まり、息を切らせながらも叫んだ。
「お～い！！」
憲司がもう一度叫ぼうとしたとき、背後で声がした。
「なに？」
憲司が振り向くと、浩二が眉間にしわを寄せ立っていた。
「浩二！」
憲司は浩二に近づく。
「どこ行ってた？」
「ああ、ちょっと散歩」
浩二はそっけなく言った。
「お前は・・・」
憲司はため息をついて続けかけたが、思い出したように言った。
「あっ！聡は？」
「知らない」
浩二は周囲を見渡して言った。
「とりあえず帰ろう。暗くなると危険だ」
憲司は嫌がる浩二を連れて小屋へ向かった。

憲司たちがいる小屋を目指し、山内と近藤は島を北上していた。

山内はたいまつを掲げている。
他の参加者（てき）に見つかってもいいということだろう。

小屋の周囲に広がる森をまえに、山内は立ち止まった。
「どうした？」
近藤が聞いた。
山内は黙って森のほうを指差した。
近藤が見ると、そこには聡が立っていた。

「おう！」
聡は手を振って言った。
「何の用だ？」
山内の問いに、聡は答えた。
「分かってんだろ？お前らを止めに。憲司は消させない」
「・・・やはりな」
山内は不気味に微笑んだ。
「刺し違える覚悟・・・か・・・」
「かもな」
「あいつに・・・賭けてるのか・・・」
「かもな」
「死ぬのが怖くないのか・・・」
「かもな」
「そんなに戦いを止めたいか」
「当然だ」
山内は戦おうとする近藤を手で制止すると、カードデッキを取り出した。
「・・・変身」
聡もカードデッキを取り出すと、言った。
「変身！！」

「遅いな・・・」
憲司は星が輝く空を見上げていった。
「大丈夫だよ」

浩二は小屋がきれいなったおかげで上機嫌だ。
「いや・・・なんか変だ」
憲司はそう呟くと、なんと言ったのか尋ねる浩二を無視し、森に消えた。
「ちょっと！憲司！憲司！」
浩二は憲司を追った。

ここはミラーワールド。
王蛇とライアが向かい合っている。

「かかってこい・・・」
「お前がこい！」
ライアは言い放った。
「・・・そうか・・・」
王者はそう言うと、ベントインした。
「ソードベント」

ベノサーベルを振り回し、王蛇はライアに突進した。
「クッ！」
ライアは攻撃を受け流し、ベントインした。
「スイングベント」
エビルウィップを装備したライアは、王蛇の背中に攻撃を浴びせた。
「グッ！」
王蛇は倒れこんだが、すぐに立ち上がり、ライアに数回、攻撃した。
「うわっ！」
ライアは吹き飛び、近くの木の幹にぶつかった。
「うっ・・」
ライアはゆっくりと立ち上がるが、王蛇はさらに攻撃を続ける。
「ウラァ！ハァ！」
王蛇の連続攻撃を、ライアは防げない。

「グッ！クッ！」
ライアはまた吹き飛び、立ち上がれなくなった。
「どうした・・・どうした・・・！！」
王蛇はカードをベントインした。
「ファイナルベント」

王蛇は構える。
ベノスネーカーが王蛇の背後に現れる。
王蛇は飛び上がり、一回転すると、ベノスネーカーの毒液とともに、
ライアに蹴りを浴びせた。
ライアは数回蹴られ、吹き飛んだ。

一瞬立ち上がろうとするが、倒れこみ、動かなくなった。

王蛇はライアを鼻で笑うと、現実世界へと向かった。

「終わった」
山内は近藤に言った。
「そうか。弱いくせにいきがりやがって・・・」
近藤は笑いながら言った。
「じゃあ、いくか？」
近藤に聞かれ、山内はうなづいた。

憲司は森の中を走っていた。
「聡！！」
憲司は不安そうな顔をして叫んだ。
「さと・・・」
森を出たあたりに、聡が倒れていた。
「聡！！」
憲司は聡に駆け寄った。

「・・・憲司か・・・」
「聡！」
憲司は聡の状態に気づきつつも、言った。
「大丈夫だ。大丈夫・・・」
聡が憲司の肩に手をおき、言った。
「憲司・・・。無理すんな・・・・・・。俺は・・・・・・もうダメだ」
憲司は涙を流していった。
「そんなこと・・・言うな・・・」
「俺は・・・役立たずだ・・・。最後・・・まで・・・」
「そんな・・・こと・・・言うな・・・・」
憲司の頬を伝っておちた涙が、聡の目じりをぬらす。
「おいおい・・・・。俺が泣いてるみたいだろ・・・これじゃ・・・・」
憲司は何も言わない。
「おい・・・気まずいな・・・・・」
「うるさい・・・よ・・・」
憲司は言った。
「おっと、浩二か・・・」
憲司が振り向くと、状況を把握し、聡の状態を悟った浩二が立っていた。
「聡・・・」
「お前まで・・・そんな辛気臭い顔して・・・」
聡は笑った。
「なんで笑ってんだよ」
憲司が言った。
「なんで・・・笑えるんだよ・・・・・」
「それは・・・いい質問だな・・・・・」
聡は浩二と憲司を交互に見て言った。
「俺は自分が正しいと思えることをした」

「なんだよ？」
憲司が涙をこらえて言った。
「山内にお前は消させない・・・」
憲司は驚き、数秒後、顔をしかめた。
「そういうことか・・・」
「俺ももうちょっとやれると思ったが、・・・強いな・・・・・あいつ」
「くそ・・・」
憲司は眉間にしわを寄せた。
「そろそろ、お別れだな・・・」
「そんなこと言うなって・・・」
憲司はまた涙を流した。
「おいおい・・・」
聡は笑うと、言った。
「それからもうひとつ。俺も役に立ったかな？」
「どういう・・・意味だ？」
「そのうちわかるよ・・・」
聡はそう言うと、目を閉じた。
「お前は・・・・・死ぬな・・・・・・・」
聡の体から力が抜けるのを、憲司は感じた。
「・・・・・聡・・・・・」
憲司は空を見上げ、叫んだ。
「聡！！！」

叫んだ憲司に浩二が駆け寄るのを、太郎は遠くから見ていた。
しばらく憲司達を見ていた太郎は、山内達を追った・・・。

第二十章・犠牲と思い（後書き）

その他の情報？
森の中の小屋
憲司が見つけた小屋。
窓は割れ、虫の住処となっていたが、憲司が掃除し、きれいになった。
『プログラム』参加中の憲司達の拠点となる。

第二十一章・新たなる力（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第二十一章・新たなる力

「山内！！」
背後からの声に、山内は振り返った。
「・・・お前か・・・」
山内の目の前には、太郎がいた。
「何か用か？」
山内は微笑む。
「当然だ！！」
太郎の表情は怒りでゆがんでいる。
「敵討ちとは・・・お前らしくもない・・・。上井に似てきたんじゃないか？」
「うるさい！！」
太郎はそう言うと、カードデッキを取り出した。
「お前は俺が殺す！！」
山内は見下したように笑い、言った。
「どいつもこいつも・・・情けない・・・」
「かかってこい！！」
太郎はそう言うと、木にくくりつけられた鏡に近づいた。
「変身！！」
山内も言った。
「・・・変身」

ミラーワールドは静まり返っている。
木から木の葉が舞い落ちる。

木の葉が地面につく寸前、急に風がおき、木の葉は吹き飛んだ。
ナイトと王蛇が衝突したのだ。

「お前だけは！！」
ナイトは王蛇に斬りつける。
「弱い弱い・・・」
王蛇は挑発的な動きで言う。
「どうだ！！」
王蛇はナイトに執拗に攻撃を加えながら言った。
「クッ！」
ナイトは倒れこんだが、王蛇の追撃をかわした。

「お前に負けるわけにはいかないんだよ！！」
ナイトはそう叫ぶと、カードを取り出した。
聡から渡されたあのカードだ。
ナイトはゆっくりとダークバイザーにカードを近づけた。
するとダークバイザーは、「ダークバイザーツバイ」へと変形した。
カードをベントインすると、音声がした。
「サバイブ」
ナイトは風につつまれる。
数秒後、ナイトがダークバイザーツバイからダークブレードを抜くと同時に、風が消え、そこには「仮面ライダーナイトサバイブ」が立っていた。

「おもしろい・・・」
王蛇はそう言うと、ナイトサバイブに突進した。
ナイトはそれをかわすと、ダークブレードで斬りつけた。
「グッ！」
王蛇はよろめき、木にもたれかかった。
「何だ？その力・・・」
王蛇は驚きを隠せないでいたが、体勢を立て直し、ベノサーベルを振り回した。
ナイトサバイブはゆっくりと王蛇に近づくと、ダークブレードでベ

ノサーベルを弾き飛ばした。
「クッ！」
王蛇は数歩後ずさりする。
「ウラァ！！」
王蛇はナイトサバイブに襲い掛かるが、あっさりかわされ、背中に攻撃された。
「うぅ・・・」
王蛇はベノサーベルを落とし、倒れこんだ。
数秒後、どうにか立ち上がると、足を引きずりながら、逃げ出した。
ナイトサバイブはそれを見つめ、王蛇が現実世界に戻ると、去っていった。

現実世界に戻った山内は、地面に倒れこんだ。
「おいおい！しっかりしろよ！」
近藤が笑いながら山内の肩をたたいた。
「うるさい！！」
山内は近藤を殴り飛ばすと怒鳴った。
「あいつ・・・俺をわざと逃がした・・・・・」
山内は顔をゆがめ、拳を木にたたきつけた。

太郎も現実世界に戻ると、木の根元に座り込んだ。
山内達がいるところからは、かなり離れている。
「なあ・・・聡。俺やれなかったよ・・・。殺す気だったのに、できなかった・・・」
太郎は聡が遺したカードを握り締めた手を額に当てた。
「クソ・・・」
太郎は膝に顔をうずめ、泣き出した。
日が沈み、すっかり静まり返った森に、太郎の泣き声だけがこだました・・・。

第二十一章・新たなる力（後書き）

仮面ライダーファイル？
仮面ライダーナイトサバイブ
ナイトが「ＳＵＲＶＩＶＥ　疾風」のカードを使い、パワーアップしたナイトの最強形態。
ファイナルベントの技は、ダークレイダー（バイクモード）で機首から発射するビームで敵を拘束し、ダークレイダーの機首を芯にナイトサバイブのマントを槍のように変化させて貫く「疾風断（しっぷうだん）」。

第二十二章・死への誘惑（前書き）

これは、有名な小説「バトル・ロワイアル」と、平成ライダーシリーズ第３弾「仮面ライダー龍騎」を合わせたような、二次創作です。
上記の二作の原作及びＴＶドラマ及び映画とは一切関係ありません。
また、原作者及び出版社、映像制作会社並びに実在の人物・団体等とも一切関係ありません。

第二十二章・死への誘惑

朝。
憲司は無言で移動の準備を始めていた。
「ねえ・・・」
浩二の呼びかけに、憲司は反応しない。
「こんなこと言っても意味ないかもしれないけど、憲司のせいじゃないよ。・・・聡が死んだのは」
「ああ・・・」
憲司は小屋の外に出ると、振り返って浩二を見た。
「意味ないな」
うつむく浩二に、憲司は続けた。
「俺のせいだ。救えなかった。まただ！」
憲司はしばらく黙り込み、言った。
「俺は何も変えられてない。何も止められてない」
浩二は返す言葉がでてこず、黙っていたが、いつのまにか歩き出した憲司の後を追った。

「あいつ・・・なんだったんだ？」
山内が珍しく早口で言った。
「そんなカリカリするなって」
近藤は少しおびえつつも言った。
「あの力・・・誰かから与えられたのか？」
山内は近藤の声が届いていないかのようにつぶやいた。
「まさか・・・あの男・・・？」
「ああ、あの強面の」
近藤が言った。
「崎原・・・とかいったか」
山内はあごに手をあててうつむいた。

「何のつもりだ・・・」
「そうだ！」
近藤が突然言った。
「崎原に頼まれてた・・・上井殺るっていうの、まだいいの？」
山内は顔を上げて近藤を睨んだ。
「坂下が先だ！・・・このままで終わると思うな・・・」
山内がさらに喋ろうとした時、彼らの背後で物音がした。

二日後、『プログラム』十五日目の真昼、憲司は本部に比較的近い北西の森にいた。
木に腰掛けた憲司は遠くを見つめている
「憲司・・・大丈夫か？」
「大丈夫！」
憲司は浩二を見ない。
「なあ・・・もう限界だろ」
「ああ、爆発寸前だ！お前がうるさいからな！！」
憲司は声を荒げた。
「いや、そうじゃない。もう何日寝てないの？」
浩二は心配そうに言った。
「お前には関係ない・・・」
憲司はそう言うと、地面に視線を移した。
「死ぬよ」
浩二はつらそうに言った。
「それでもいいんじゃねえの？」
憲司が吐き捨てるように言った次の瞬間、浩二が駆け寄って憲司の両肩をつかんだ。
「しっかりしてよ！死んだらどうなる？どうなる？誰が喜ぶ！？誰も喜ばないだろ！！」
浩二は珍しく大声で怒鳴った。
「もう・・・俺には・・・」

憲司の消え入りそうな声をかき消すように、女性の声が聞こえた。
「ねえ！お二人さん」
二人が振り向くと、そこには同級生の「沖田（おきた）　京子（きょうこ）」がいた・・・。

第二十二章・死への誘惑（後書き）

キャラクターファイル？
沖田（おきた）　京子（きょうこ）
１５歳。２０ＸＸ年度の高代中学校３年３組。
学年のマドンナ的存在で、男子からの人気は高い。
『プログラム』参加中は、ある目的のために憲司に近づく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8850j/

仮面ライダー龍騎　Middle schoolウォーズ

2011年3月26日19時34分発行